

《書評》

Joseph Bristow, ed.,

Oscar Wilde and the Cultures of Childhood

New York: Palgrave Macmillan, 2017.

松村 伸一

オスカー・ワイルドが子ども文化に寄せた関心を探究する初めての批評論集——そんな宣伝文句を本書裏表紙に見て、不意打ちを食らう思いがした。ワイルド全作品の中でも『幸福な王子、その他の短編』(1888年)と『ざくろの家』(1891年)は、最も広く愛読され、すでに多くを語られてきた作品と漠然と見積もって、〈ワイルドと子ども〉を主題とする論集の二つや三つは(私が知らないだけで)とっくにあるものと思いついでいたのである。

確かに、書籍の形で刊行された本格的なワイルド童話研究と言えば、これまたまことに意外なことに、Jarlath Killeen, *The Fairy Tales of Oscar Wilde* (Aldershot: Ashgate, 2007) および Anne Markey, *Oscar Wilde's Fairy Tale: Origins and Contexts* (Dublin: Irish Academic Press, 2011) と、たかだかここ10年程の間に出版された2冊を挙げうるのみである。改めて調べてみたものの、論文集となると確かに本書が最初であるらしい。研究者らによるこの長きにわたる等閑視はいったいどうしたことなのか。またなぜ昨今、少しずつとはいえ、子どもというプリズムを通してワイルドを読み直す試みが現れはじめたのか。いずれも簡単な答えなどない擬似疑問だが、釈然としないまま本書を繙いた。

編著者 Joseph Bristow の「はしがきと謝辞」によると、本書は2015年5月に UCLA クラーク記念図書館で開催されたシンポジウムに由来している。インターネット上に残るこの conference の開催案内と照合すると (<https://www.1718.ucla.edu/events/wilde-childhood/>)、一名異同はあるものの、Lorraine

Janzen Kooistra や Diana Maltz に Margaret D. Stetz といった世紀末文学 / 文化研究者、Maria Tatar や Perry Nodelman のような高名な児童文学研究者等々からなる執筆陣はすでにパネルに名を連ねており、写真史研究で知られる Lindsay Smith も「池」を越えて参加している。big names を揃えたというだけでなく、文学・児童文学・視覚文化・社会史と異分野の専門家らが多角的な議論を展開しつつ、結果的に各々が微妙に響き合っているのは、コーディネーター Bristow の力量だろう。

〈ワイルドと子ども〉の主題を「ワイルドの子ども」と読み替えたのは Diana Maltz である (Ch.3 “The Good Aesthetic Child and Deferred Aesthetic Education”)。ここで Maltz が提示する「家族文化としての唯美主義」(71 頁) という視点は新鮮だ。審美家が親になれば、いずれ自分の収集品を相続する子どもの審美眼を養うことは、少なからず切迫した現実問題である。また子どもの側からすれば、唯美主義者の子どもであるということ、つまり、洗練された室内装飾に囲まれて美術工芸品に幼い頃から親しみ、世間からは変人扱いされる両親を持つということが、子どもにとって何を意味したかという問題となる。Maltz はそのような「唯美的な良い子」の例として、1890 年代ロンドンを背景に少年 Michael Fane の成長を描いた Compton Mackenzie の唯美的教養小説 *Sinister Street* (1913-14) と、Vyvyan Holland の二冊の自伝を取り上げる。彼らは確かに審美眼を備えてはいるが、それはむしろ自らの読書を通して培われたものである。「親はなくても／あっても子は育つ」の戯言通り、それぞれに身の丈と好みに合わせて成長していくのである。Vyvyan が切手収集を趣味とする学者肌の控えめな人物に育ち、葡萄酒に詳しい美食家となったと語る結びに、不思議な安堵感を憶えるのは私だけだろうか。

Lindsay Smith は第 2 章 “‘Play[ing] Narcissus to a Photograph’: Oscar Wilde and the Image of the Child” において、写真の技術的発達と並行して、被写体としての子どもの重要性を跡づけつつ (死児を写した一点物の陽画写真が両親の慰安に果たした意義など)、ワイルドにとってもまた、子どもの写真がいかに重要であったかを論じている。主に取り上げられるのは、よく知られたコンスタンスとシシルの写真、イートン校の制服を着たシシルとヴィヴィアンそれぞれの肖像など家族の写真のほか、晩年のワイルドと

文通した Louis Umfreville Wilkinson (1881-1966) が送ったものや、ワイルド自身が撮影したイタリアの若者の写真などである。Smith はこれらについて「写真に撮られた子どもの顔には、それを見る大人を幼年期の状態と同一化させるより一般的な潜在力がある」(55頁)として、ナルシスの神話的テーマと結びつけている(論文タイトルは Wilkinson に宛てたワイルドの手紙にある文言)。こうした観点から『ドリアン・グレイの肖像』や、『ざくろの家』に反復される鏡と光のモチーフに加えられる解釈は興味深い。

Kooistra と Amanda Hollander は、それぞれ Laurence Housman および Evelyn Sharp の童話を取り上げ、ワイルドとの関連性を探っている。Kooistra の指摘によると、Housman の童話集 *The House of Joy* は 1895 年、ワイルド裁判の年に『ざくろの家』を連想させる書名であえて出版されているのみならず、『幸福な王子』の装画を引き受けた Walter Crane の装丁理念、すなわち書物を “the home of both thought and vision” と考え、家の構造になぞらえて書物をデザインする理念を意識している点で、ワイルドの遺産を引き継いでいるという。各篇の口絵と物語の読解は丁寧で説得力に富んでおり、それらに描かれた窓や扉は自由の可能性を、人が手入れした植物群は生命の共生を、道や川のモチーフは旅路としての人生を、それぞれ象徴しているという結論に自然に収斂していく。「ハウスマンの八篇の童話はいわば、ワイルドの元々の四部屋の上に二階を建て増したようなもので、この renovation の効果は奥深い」(114頁)と結んでいるのは洒落ている。

一方 Hollander は世紀末の童話における衣服とジェンダーに着目し、特に Evelyn Sharp の童話集 *Wymys* (1897) 所収の “The Boy Who Looked Like a Girl” とワイルドの「幸福な王子」に焦点を合わせている。Evelyn Sharp (1869-1955) は *Yellow Book* にも寄稿した New Woman 作家の一人で、Housman と同じくフェビアン協会に所属しただけでなく、戦闘的女性参政権運動団体 Women's Social and Political Union の重要なメンバーであり、その政治的立場は初期の短編小説や童話にすでに色濃く反映されている。上記の童話は、女子が着るスモックを着せられて脱げなくなった主人公がおとぎの国に迷い込み、人と遭うたびに自分が男の子だと相手に主張しつづけるという話で、そのテーマは明白だろう。Hollander は同作に解釈を加えつつ詳しく紹介する一方、Sharp の盟友でもある Edward Carpenter に

よる「中間的な性」の主張(男女はふたつの集団ではなく、一集団の両極であるとする説)との類縁性や、Sharp自身による舞踏史*Here We Go Round: The Story of Dance* (1928)で言及される異性装ダンスの風習にも触れている。この童話と並べてみると、確かに「幸福な王子」は脱衣の話であったと気づく。こちらに関するHollanderの解釈は、Killeenの政治的な読解に傾きすぎと見る向きもあるかもしれないが、そう主張するのであればHollander/Killeen以上に魅力的な解釈を提示する必要があるだろう。

思いがけず大笑いさせてくれたのがMargaret D. Stetzである。Stetzはワイルド作品のいわゆるafterlifeを渉猟して、ワイルド童話のモチーフを無断借用した児童文学作品から、子ども向けにリライトされた名作シリーズ中のワイルド作品まで、なかなか目にする機会のない読み物が次々と紹介されていく。創作作品はさておき、リライトに対するStetzの舌鋒は容赦ない。登場人物が青春テレビドラマから抜け出したようなやりとりをくり広げる2007年版*Salome*については、ヘロデ王の台詞を借りて“Kill that author!”と宣告し(206頁)、現代アメリカに舞台を移した(そして一冊売れると1ドルが慈善団体に寄付される)2006年版*The Happy Prince*の最終ページのイラストでは、王子とツバメのおかげで幸福になった「多人種の多世代的な」会衆が公園につどって両者を弔う図が描かれていると紹介し、あと足りないのは「コークと笑顔」だけだと嘲弄する(215頁)。Stetzがこんな意地悪を演じてみせたのは、教育界にはびこる商業主義と知的衛生思想への憤りからと推察されるが、状況はもちろん対岸の火事どころではない。

Perry NodelmanとMaria Tatarの寄稿は発表原稿の延長という趣が否めないが、おとぎ話や児童文学が大人向け文学とどう違う／違わないのかという根本問題をめぐって示唆に富んだ考察を展開している。またJoseph BristowのIntroductionは、ワイルド童話の出版史を振り返った後、「わがままな大男」についてMarkeyやKilleenを援用しつつ多角的な解釈を試みており、今後同作を論じる際の必読テキストとなるだろう。後半部は通例通り各章の紹介であるが、一般的なIntroductionと比べて補足説明に力点を置いているように思う。たとえばSmithが手短かに言及した、ワイルドが撮影したイタリア人青年の写真について約2頁を費やしていたりするので、

ここは後回しで読んだ方が良さかもしれない。

冒頭の擬似疑問に戻ると、まず「なぜ昨今」というほうについては、“the Second Wilde Revival” (Helena Gurfinkel) とも呼ばれる潮流において、主題としての同性愛が求心力を弱め、方法論として理論より歴史性・物質性が重視される中、童話・子どもの主題が浮上してきたということが考えられる。「長きにわたる等閑視」については、そもそもそう言えるのかというところから検証する必要があるだろう。そういえば、Bristowは「幸福な王子」の翻訳についても触れていた(3頁)。日本における『幸福な王子』の翻訳史や教材化の経緯など、すでに研究されているだろうか。今度は不意打ちを食らわないことを祈る。